

青森県立五所川原東高等学校

住所 五所川原市大字羽野木沢字隈無一七九

生徒数 男子九八名 女子六三名

部員数 男子一〇名 女子二名

顧問 佐藤 善一・北山 彰子

本校は全日制の高等学校では県下最小規模であり、全校生徒数が一六一人である。地理的には市街地から10 km以上も離れた山間に校舎が位置し、路線バスの便も悪いことから通学条件としては恵まれている環境にはない。全校生徒の九割以上が自転車通学であり、近隣の板柳町・鶴田町から15 kmも自転車で通学して来る生徒もこれに含まれる。彼らは冬期間の交通手段がないので十二月から二月まではスクールバスでの通学になる。今年の入学生を見ても板柳町・鶴田町の生徒で半数近くを占めていて、部活動でも中心となって活動している彼等がこの期間スクールバスで早く帰ってしまうために、空手道部も新人戦後はほとんど活動できないで翌年の春季大会に臨んでいる状況である。

空手道同好会が発足したのは、私（佐藤）が赴任した昭和六十一年の四月である。この一年間の練習場所は廊下と生徒会室であった。同好会の性質上、練習場所や予算面での援助がないのは当然のことであるが、この年の新人戦にデビューした際は、鶴田高校から選手分の防具一式を借りての参加であった。成果は惨敗であったが、参加費・遠征費等すべて自己負担しながらも意欲に燃えて活動した年であった。この年の会員は三人。人数が少ないながら

も地道な活動が認められて翌六一年には部に昇格したものの新入部員は一名のみ。体育館の三分の一が練習場所として与えられたが顧問を入れて五名での活動が続いた。

小規模校である本校が、各運動部の部員数確保のために取り組んだのが、昭和六二年からの部活動全員加入制である。これは新入生のみ、入学した年の一年間は全員いづれかの部で活動しなければならぬというものである。先生方も全員が顧問として配属され、負担もあったが、校長始め全職員の共通理解のもとにスムーズに運んだ。いざ蓋を開けて見ると、新入生はこの年も他の部に流れ、空手道部への入部者は三名のみ。その中で一名が学校を去り、この年は六名で活動した。一年間という部活動の拘束期間が過ぎた後は、退部する部員が多い中で我が空手道部の定着率は比較的良く、現在に至っている。この年は初めて全学年の部員が揃い（総勢六名の小人数ではあるが）、空手道部の土台ができた年であった。

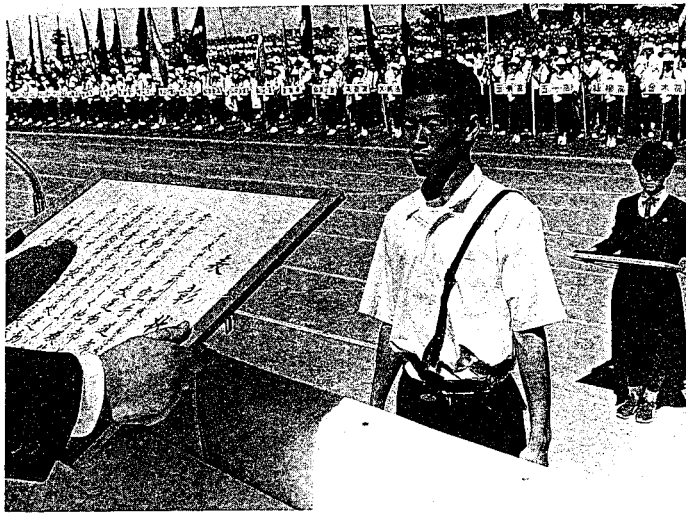
翌六三年には新入生が十名入部し、空手道部も活気が出て来る。この年から夏休みの合宿も実施するようになり、現在も続いている。場所は毎年変えており、五所川原市内、小泊村、黒石市等さまざまである。

平成元年度には活動も充実してきて、初めて有段者が出た。この年から団体戦も三回戦までコマを進めるようになった。女子部ができたのもこの年である。

過去最高の実績（他校から見ればたいした成果ではないが）を残したのが平成二年度である。部員数は男女合わせて二十名。青

森県選手権大会では個人組手第三位、高校総体並びに新人戦の団体戦でもそれぞれ二回戦・三回戦と勝ち進んでいる。団体戦で二チームが参加できる部員数になったのは前年からであるが、実を結んだのはこの年であった。

翌年平成三年には、これまでの実績が評価されて、八戸市で行われた高総体総合開会式において、青森県高等学校体育部部活動奨励賞を受賞した(写真)。県下最小規模の学校であり、中学校での経験者はこれまで一人もいない。本校の一個学年在籍生徒数を上回る部員を有する高校もある中で、それらの学校と肩を



並べて活動し、ある程度実績を残せたことへの評価だと思う。この時の受賞の写真入り記事は、地元の新間は素より、今年度の青森県高体連新聞でも大きく取り上げられた。

この年のもう一つの思い出は、台風一九号である。恒例の夏休み合宿を終えて新学期を迎え、新人戦に向けての練習が軌道に乗り出した矢先のことであった。渡り廊下が倒され、体育館

の屋根が飛ばされた。体育の授業はもちろん、運動部の練習も廊

下での展開となり学校のあらゆる活動に支障をきたした。文化祭は中止、球技大会及び二学期終業式は「藤崎町スポーツプラザ」を借りての実施であった。新人戦を控えた空手道部は、羽野木沢小学校の体育館を借りて練習できたものの、曜日や時間の制約があり、思うようにできなかった。修復は翌年二月末までかかり、ぎりぎり卒業式に間に合うことができたが、実に長い半年間であった。

明けて平成四年度、今年も新人部員は男子二名・女子二名と相変わらず少いが、すでに高校総体で、団体戦二回戦進出、個人組手では国体強化指定選手を破っての四回戦進出(ベスト十二)を果たすなど実績を上げている。小規模校であり、部員の卒業生がこれまででまだ二十名と、歴史も浅い本校空手道部であるが、毎年部員数確保に苦労しながらも、地道に活動を続けている。

(年度) (顧問名)

(卒業部員数)

昭和六〇年度	佐藤 善一	
昭和六一年度	佐藤 善一・廣澤 昭典	
昭和六二年度	佐藤 善一・廣澤 昭典	三名
昭和六三年度	佐藤 善一・中野るり子	一名
平成 元年度	佐藤 善一・中野るり子・工藤 幸穂	二名
平成 二年度	佐藤 善一・中野るり子・廣澤 昭典	九名
平成 三年度	佐藤 善一・北山 彰子	五名
平成 四年度	佐藤 善一・北山 彰子	